



理事会だより (6・12)

- 一、協会報七百号記念令和7年小田原秋季俳句大会は七百句を目標に役員、理事、会員の積極的投句をと、長谷川副会長より要請あり。各準備状況は① 協会員については各グループの日程を考慮し本理事会までに投句案内交付 ② 協会外には五月末に案内発送済み、既に投句あり ③ 小野理事より近隣団体にも配布済、各地俳句大会へ投句、参加をしましょうとの提言。
- ④ 小田原市への後援等申請を近々行う。(①②は加藤・須田・菅野理事④は長谷川副会長)
- 二、秋の吟行会の場所につき意見交換し来月理事会に具体策を提案する。(総務部担当)
- 三、協会報七百号となる十一月特集号の企画(会員の一句その他)概要につき来月理事会に具体的提案をする。(広報部)

「俳句おだわら」10句抄(694号より)

小島ノブヨシ 抄出

鳩と化す鷹の一羽は狩行とも
たんぽぽの絮や飛び立つ軍用機
亀鳴くや曾我の誉と言ふ地酒

のがわきいち

いぶりがつこ老婦の手皺歴史あり

風光る死ぬまで生きる被曝牛

連翹や宿す枝先の磁力線

婆ひとり座して臍の中にある

三桎の花や有言不実行

きーこきーこにやあにやあ自転車が二台

佐宗 欣二 抄出

豆苗のレシビあれこれシャボン玉

梅散るは刻のひらひら舞ふごとし

新聞の句ひを開く春の雨

桜咲きこの世に居ない人ばかり

しつぱりと濡れ三寸の甘茶仏

老境のくらしのリズム茎立菜

小流れのさざれ石へと春日影

人文字に村人も出て卒業す

啓蟄や平飼ひ鶏の利き蹴爪

息一つ足して稿書く日永かな

底ぬけの津軽三味線空芯菜

池田 忠山

深澤 一華

鳥海 壮六

岡本 史郎

佐々木重満

山田 照子

瀬戸 正洋

大石 雄介

杉山あけみ

近藤 久江

和田恵美子

瀬戸 悠

田中 幸子

中根登美子

陌間みどり

庄司 下載

大島美恵子

古屋 徳男

大石 和子

夜釣りかな 瀬戸 正洋

エスカレーターの前で躓く立夏かな
意図的な判断意図的な金魚
言論弾圧熱中症で人が死ぬ
土壌汚染熟れたトマトとプチトマト
遠蛙プラスチックとプランクトン
ロールパン山食パンやアロハシャツ
夏座敷カロリーコントロールしても無駄
年うへの妻働かせ夜釣りかな

膝笑う 杉山あけみ

つばくろの巢立ち留守電消去する
不可解な三角関数枇杷を剥く
蜘蛛が走るよ他人事のような貌で
凌霄花ぼとり朱色の胸さわぎ
インドメタシン六月の膝笑う
烏瓜咲いて審議は先送り
充電にちよっと手こずる梅雨満月
でで虫になつてみるのも悪くない

俳句おだわら（6・19メ切り、到着順）

◆小田原鹿火屋（5・16） 久江報

浦島草釣り上げてゐる山動く 足立 和子

目瞑れば妣の声する菖蒲の湯 川本 育子

風幽か交みつ蝶の高さかな 高橋 小糸

山からの風さやさやと花みかん 湯浅 義幸

石楠花や夫と越え来し峡の風 近藤 久江

◆山北（5・22） 由里子報

野球帽どの子も似合う子供の日 和田恵美子

夏帽子目深に肩はむき出しに 星 一義

柿若葉ポテトサラダの出来上がる 石田加津子

てきぱきと足場の組まれ君子蘭 竹下由里子

◆香雨・梅ごち（5・25） 忠山報

解体の始まる家や花は葉に 肥後ちさこ

どこからも見ゆる天守へ緑さす 関戸わよこ

竹の子のいち夜に吾子の背丈ほど 門松 鳳文

奥座敷あけ放たれて風五月 吉田 百代

出港の早起釣舟夏はじめ 吉田 康雄

ままごとの子を見ずなりぬ柿の花 陌間みどり

日を返し風の途切れて庭薄暑 小澤 純子

夏の一ページ 高杉掘三朗

露天湯にあぢさゝる列車ひびきをり
 六月のチャペルの鐘がさんざめく
 ラムネのむ二十世紀の味深し
 落書きの早も九年の端午かな
 嬰兒の眼花火の映ゆる宝箱
 代掻くや水を湛へて田から田へ
 下校児のけふもしんがり水馬
 うすれゆきわすれゆくなり夏見舞

オキナワ 高井幸子

海の碧あお色々に島の夏
 花好きの空き家は今もジャスミン・バラ
 野良小屋の屋根飛び越えてハイビスカス
 有明葛^{アラマンダ}か弱き者の底力
 三線の歌声軽しオリオンビール
 基地の街芝生の外の炎暑かな
 若夏や杖つく友の口軽し
 デイゴの花永久の平和を御詠歌に

狩行忌の近し光陰うべなへず

◆こよろぎ(5・16)

つとむ報

池田 忠山

夕暮れのいまだ明るき豆御飯

大澤 紀子

母の日やあの日のやうに手揉み券

高杉掘三朗

明易し動くともなき油送船

植松テル子

母の日の手づくりの味稻荷寿司

神山つとむ

◆春野(5・18)

きよ志報

香水のさまよつてゐる無人駅

伊藤はる子

鳴り止まぬ恋の形見の貝風鈴

内田知江子

馬鈴薯の花やジャガタラ文哀し

尾崎 一夫

風穴の靈氣あびたるうすごろも

瀬戸 悠

酢で締める鰯の光れば指もまた

二見 和江

笛吹けば皐月の空に響きをり

ミステウレッタ弘美

夏場所の力士の肌の艶めける

長谷川きよ志

◆沈丁(6・5)

寶子山報

浴衣より足の出てゐる子の成長

若村 京子

浴衣着て運動靴で踊る子供連

柳澤ミサ子

足湯する母子揃ひの貸し浴衣

田中 恵一

寂聴の青空説法泉わく

河本 純子

古浴衣おしめに直し子は育ち

勝木 澄子

そら豆やドーナツ枕に吾子眠る

菅野 英余

ゴンドラ 出澤洋子

ゴンドラの前のめりして新緑へ
 薫風や港見下ろす風見鶏
 太平洋霞める岡の異人館
 空と海とあわひを六甲青葉風
 神戸牛の鮓のもの仕立て宿の膳
 神戸牛炙り吸物夏の膳
 抹茶席菓子のおやめの「ビューティフル」
 白革靴買ひてをんなの神戸旅

花菖蒲 高橋みどり

花菖蒲いつしか我背正しおり
 サンガラス掛けて一時若返る
 木目込の雛の丸顔穏やかかな
 夕暮の疲れ解るる花蜜柑
 夕さりの青田へ山は影落とし
 せせらぎの瀬音に和む夏座敷
 新樹光会話弾みしバスの旅
 終の一滴まで愛しむ新茶かな

鳥の口螻蛄^{けら}食みだして着地かな
 大名の踏みし古道や泉わく
 蝸牛こりこりほぐす笑いヨガ
 朗読やことばの泉夏キラリ
 母の日や野菜ぎつしりハンバーグ
 「森と泉に…」口ずさむ夫夏始
 浴衣の子きんぎよのやうに帯ゆれて
 三島路の湧泉流れ柿田川
 梅花藻や光の破片^{かけら}渦に乗せ
 メリーさん笑顔はじける初浴衣
 青春がぎくしやく通る泉かな

◆みなみ(5・17)

高井 幸子
 片野 節子
 峯尾ユキエ
 清水美代子
 松下 俊之
 武居裕美子
 森田 久江
 川瀬 芳子
 鈴木 陽子
 神田 征夫
 寶子山京子
 かほる報
 加藤 健治
 市川めぐみ
 豊田 幸枝
 斉藤 静
 小瀬村信子
 柳川 紀枝
 加藤 富江
 川上 靖子
 加藤かほる

◆青梅(6・11)

幸子報

天つ日 古屋徳男

草笛や空のひと隅日のこぼる
花菖蒲小流れ音を刻みをり
前山に日のなみなみと曝書かな
川蜻蛉朝光の葦そよぎけり
天つ日の垣に雀や梅を干す
青田道雨脚細く音もなく
涼風や鷺の川瀬に鍬洗ふ
夜鴉の一声放つ門涼み

冷し酒 陌間みどり

青梅雨や血筋浮き立つ仁王像
函嶺のぐんと近づく梅雨晴間
ビー玉の青き花留め夏めける
大伯父の舶来好み巴里祭
深刻な話かはして冷し酒
熊蟬に誹られてゐるずる休み
雨粒を吸ひ美しき蜘蛛の飢ゑ
病葉の一葉に負はす罪と罰

梅雨晴間ふたりがよろし遠まはり
万緑の中へ傾なたれてゴッホ展
初夏の風のかんげい畑仕事
茄子苗やはか農婦の小半日
◆おほゐ(6・14) きよ子報
植田光る「鼻取りしたよ」ははの声
鎌倉や青葉の谷津に異邦人
老鷺や衰えしらぬ張りど艶
パレットに夏の絵具を絞り出す
夏富士やひとすじ残るど根性
待つことも一つの手段夏木立
淋しき日健気に咲きし余花に会う
心地よき葉擦れさわさわ夏木立
青年の夢立ち上がる夏木立
筋書きの立たぬ余生や蝸牛
夏木立日陰ほっこり息をつく
雨に濡れ弾みし毬の濃紫陽花
一列に下校の子らや青田風
北の島競ふ鳥声夏木立
額の花心ざわざわ今朝の雨
手水鉢水面に遊ぶ七変化

◆草むら(6・18)

重満報

大塚 行人
加藤まり子
久保寺トミ子
田中 幸子
二上 光子
横塚 昌平
石井千代子
小野 菊土
香川 花子
加藤 春江
瀬戸とみ子
高橋みどり
中根登美子
中村 昌男
中津川晴江
廣田 悦子
原 仁子
松良 榮美
安池 利枝
石井きよ子

髪洗ふ明日は病院行く日なり
代田水母乳は限り無かるべし
禪寺の百間廊下雲の峰

◆鷹（6・6）

壺に挿し乾きて強し麦の芒
回らして首こきと鳴る朝曇
筒つぼの幼時の写真昭和の日
せせらぎの心地よき音夏初め
読み返す詩集に附箋月涼し
原っぱにサンバのリズム罌粟の花
砕かるる昭和のビルや夏燕
水滾つ峡の岩瀬や合歓の花
薔薇園のベンチ詠む人描く人
暖簾くぐれり白扇に師の一句
茶摘待つ整列の畝光集む
灯の入りし島の朧へ渡りけり
アネモネや鐘の音聞きて旧市街
蒲公英や逆上がりの子空仰ぐ
ペットボトル堰に漂ふ麦の秋
針槐の香り漂ふ湖畔かな
板塀に透ける旧家や椎の花
伽羅路の鍋に眼鏡のくもりけり

十五報

石井 秀稀
佃 悦夫
佐々木重満
池田 令子
西賀 久實
佐宗 欣二
中田 笑子
山崎美知子
石川 州洋
庄司 下載
瀬戸 りん
高橋久美子
中山智津子
齊藤 桂
芹澤 常子
深澤 一華
松岡美和子
大島美恵子
加藤 幾代
高橋千代子
米山 翠

覗きたる文士の庭や柳蘭
父に汲む清水や薬師画の瓠
梅の香の厨に満つる清夜かな
客を待つ女将一人の夏料理

病葉や握り返した大きな手

苔清水御朱印貰ふ妻を待つ

草刈や小鷲の飛影いくそたび

ほこり臭き雨降り梅雨に入りにつけり

洗ひ髪乾く音する夜さりかな

◆実のり（6・18）

たか志報

こんこんと湧水の景螢舞ふ

「螢田」はむかし螢の飛びかひて

源平の歴史ひもとく螢の夜

立葵挑戦つづく逆上り

草庵の裏に消えゆく恋螢

◆零（6・19）

史郎報

夕焼に優るものなし空の涯

慟哭の自由の女神へ薔薇を百万本

真白なる雪の下群なして誇らしげ

人力車会話弾ませ風薫る

悠悠と風を受けたる夏大樹

梅雨晴れの風いっぱいに窓あける

來田 新子
青山 典仁
小林 環
澁谷 明子
下平 美子
鳥海 壮六
古屋 徳男
守屋 まち
村場 十五
荒井ちゑ子
岩本ひさみ
杉本 久子
木村 幸枝
新井たか志
青木たけを
伊藤 道郎
川合 昌子
佐藤 正子
中村 裕子
のがわきいち

平凡と非凡をまとい夏は来ぬ
ネット界偽名で貶す誘蛾灯

◆無所属

夕立や竹百幹の百ぞめき

板の間のひろびろとある卯波かな
高架線袈裟斬りしたるつばくらめ

業だ業だと鮫鰈を抱いている

尺取虫アーチの中に春の街

梅雨前線夫婦げんかの停滞す

ジャズ奏でる津軽三味線はじけて夏

入梅やラインの中に居る曾孫

靱の中に催涙スプレー盛夏かな

いまさらにもう甦らずもつりしのぶ

指先の弾みだしたる土筆摘み

風薫る四代目といふ宮大工

異国に戦麦秋の道でこぼす

六月の底にふくらむ無の思索

腰痛と膝痛歯痛亀が鳴く

追伸に本音一行青葉木菟

湘南のちよい悪親父クルビズ

父さんの声は鉄色木下閣

山笑ひをり天皇の遠眼鏡

本多登美子
岡本 史郎

小林永以子

畠 梅乃

出澤 洋子

大石 雄介

大石 和子

大佐田うづき

一ノ瀬茂代

岩楯恵津子

瀬戸 正洋

山本 すみ

山田 照子

青木 勝子

田畑ヒロ子

小澤 園子

杉山あけみ

北村 文江

岡田 典代

須田 聡子

小島ノブヨシ

俳句おだわら鑑賞（令和7年5月号）

一ノ瀬茂代

げんげ田や任地へ続く一本道

高井 幸子

早春の峡の田には、緑肥として、秋に蒔いた蓮華草が一面に花を咲かせ、「げんげ田」と呼ばれる。その景の中都会から地方へと勤務先の替わった人がゆつくりと歩いている。これからの生活を少しの戸惑いの中スタートさせた人の前に一本の道が延びている。小鳥の囀り、子供の声、会釈のお年寄、道には沢山の出会いと希望が満ちあふれています。一本道がとても力強くこの一句を支えていると思いました。

深澤一華

若草や墓石に知れる祖先の名

小林 環

昨今の墓事情は、少子高齢化や核家族化、価値観の多様化等の社会情勢を反映し変化している。故郷の墓じまいをせざるを得ないケースも増えているし、受け継がれることにこだわらないケースも増えているようだ。墓参りに祖先の名前を再確認することが、今後はどうなっていくのだろうか？考えさせられてしまった。墓の回りにみずみずしく今年も草が生えてくる景に、この家の未来を感じた。

長谷川きよ志

へらへらとへくそかづらのにほひをり

内田知江子

「は行」のへ・ひ・ほ、「ら行」のら・りがオノマトペにより心地良いリズムを生み、効果は充分。屁屎葛を敢えて平仮名表記にすることであの悪臭が詩的な余情を醸し出している。「へくそかづら」と季語に六音も使っても十七音の定型に納めた手法も見事である。

新涼や銀河鉄道栢山駅

大石 和子

大試験そして兔が脱走した

大石 雄介

鮎色の母のものさし菊日和

大木 敬子

善き人は先に逝くらし額の花

大佐田うづき

流木に座る中洲や雁渡し

大沢 年子

曾我山にしづむ朝月稲穂波

大島美恵子

同胞の集ふひと日やみかん山

大塚 行人

十葉の抜かれて風の通る庭

岡田 典代

枯野原落人村めく老人ホーム

岡本 史郎

甚平を着て粗大塵には非ず

尾崎 一夫

装いの一氣に冬や吟行会

尾崎 幸子

畠 梅乃

独り居の障子明りや臨書終ふ

大島美恵子

デジタルな生活で鉛筆で字を書くこともままならない

私にとっては、臨書などなさる方は、どれほどの教養の持ち主かと尊敬に値する存在である。しかも障子のある暮らし。さぞかし整然と暮らしていらっしゃるのであろう。「独り居」が、独り暮らしなのか、たまたまの独りなのかはわからないが、しんと整った部屋で臨書を終えた。「障子明り」からは、作者の緊張がほぐれた充足感が感じられる。そして、ふつと墨の香りも漂ってくるようである。

空っぽになりたくて鞆轡を漕ぐ

内田知江子

青糸蜻蛉になつて飛んでる五月の喪

大石 和子

川蜻蛉の群がっている静脈かな

大石 雄介

新緑や嫁の役終へ喪服脱ぐ

大木 敬子

日雷ゼウスは今日も女好き

大佐田うづき

揚ひばりたばこ一服ふかしけり

大沢 年子

バス停に風鈴を聞く夕べかな

大塚 行人

長靴は十四センチかたつむり

岡田 典代

自分史を校正すれば真葛原

岡本 史郎

死ぬ時は誰れもゐない春の夜

尾崎 一夫

装いの一氣に冬や吟行会

尾崎 幸子

青木 孝子

あたたかや手足はみ出す乳母車

加藤 健治

一読して景が目には浮かぶ晴れ晴れとした気持ちの良
い句である。「手足はみ出す」の言葉には赤子の生きる
力強さを感じ未来への希望を思う。季語がこの句に柔
らかに穏やかな時間を読み手に共有させる。

日常の景ではあるが平和な国に暮らしているからこ
そ出来る句である。

無花果やもの言ふときは控へ目に

小澤 純子

遮断機の向こうの顔も師走かな

小澤 園子

大寒の駅舎灯りて始発来る

小野 菊土

朝顔や父より繋ぐこぼれ種

香川 花子

梅漬ける旨くなれよと手に力

風間 秀泰

ひとクラス横一列に大根引く

柏木 良花

春立つや十二支生まる飴細工

片野 節子

かき氷言いたき事を飲みこんで

勝木 澄子

江ノ島を遠見に母と蓬摘む

加藤 幾代

春の水こぼして水車動き出す

加藤 かほる

富士山を見上げる百のサンガラス

加藤 富江

近藤 久江

丹の橋のたもと展けり花菖蒲

片野 節子

小田原城への登城口に花菖蒲が咲き出すと、五月の
風に城は一気に活気づく。小田原城は、北条五代・百
年の歴史を歩んできた。戦さに備え、小田原城と城下
の巡り九里を堀と土塁で囲む、総構を築いて防衛に力
をそそいだ。また農民に対しても「禄寿応穩」の虎印
判による思いやりある政治を行ってきたことで知られ
る。凛々しい姿の小田原北条の姿を、この花菖蒲に垣
間見るようである。

ひかりとも風とも庭の新樹より

小澤 純子

炎天や脳の海馬が眠りこけ

小澤 園子

若葉風時を旅する樟大樹

小野 菊土

節くれた指よりリズムの茶摘唄

香川 花子

梅漬ける旨くなれよと手に力

風間 秀泰

幼子の真つ赤な帯や星祭

柏木 良花

元気がる事も肝心新茶飲む

勝木 澄子

小田原の富士は台形夏は来ぬ

加藤 幾代

刻という外側を生きかたつむり

加藤 かほる

軋ませて閉づる校門梅雨夕焼

加藤 健治

多国籍の箱根にぎわう木の芽風

加藤 富江

小田原俳句協会報七百号記念

令和七年度小田原秋季俳句大会

第一部 作品募集

兼題 「秋の空」「木犀」(いずれも傍題可) 各一句一組

未発表作品に限ります。

締切 令和7年8月1日(金) 必着

整理費 一組につき千円(何組でも可)

投句先 〒250-0853 小田原市堀之内七九

須田聡子 ☎〇四六五・三六〇〇九四

*作品は原稿どおり印刷しますので、楷書で、

大文字小文字をはっきりとお書きください。

選者 協会役員及び各地有力作家(投句者に限る)

賞 *小田原市長賞以下三十位まで(記念大会のため従来より入賞者を拡大します)

*選者特選賞(今大会は当協会以外の各地俳句協会役員の方にも願います)

第二部 俳句大会

日時 令和7年10月11日(土)

会場 おだわら市民交流センター(UMECO)

受付 11時から 投句締切・12時 開会・12時半

整理費 千円(呈飲料菓子)

席題 秋季雑詠二句 総互選

賞 小田原俳句協会会長賞以下出席者全員を表彰。

(主催) 小田原俳句協会 (後援) 各地俳句協会

寿齢者表彰

令和七年一月一日以降七年十二月三十

一日までに満年齢で古稀、喜寿、傘寿、

米寿、卒寿、白寿を迎える协会会员。投句

が条件ですので該当の方は奮って投句下

さい。

理事会日程 7/10 8/14 9/11

(毎月第2木曜日 けやき15時より)

*会議室は13時から利用可能ですので理事会開始

までに打合せ、句会等にご利用ください。

◆お詫びして訂正致します◆

5月号694号7頁 加藤健治さんの句集名と賞名

(誤) 足柄路・清雲賞

(正) 足柄峠・青雲賞